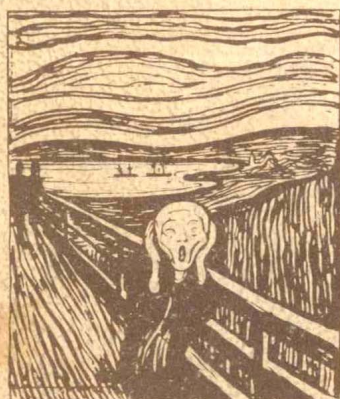




内灘夫人

五木寛之作品集 7

1973年4月20日第1刷

著 者／五木寛之

発行者／樫原雅春

発行所／株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話（代表）03-265・1211

印刷所／凸版印刷株式会社

製 本／大口製本印刷株式会社

定価 470円

© 1973 Hiroyuki Itsuki Printed in Japan

0393-512070-7384

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します



内
灘
夫
人

装幀／養老正也

レタリング／原アト・アクチュアル

カバー・表紙カット／エドワルド・ムンク「叫び」より

内灘夫人

△一九六八年八月三十日～一九九年五月十日新聞連載▽

誘惑

森田克巳^{かつみ}がそのひととはじめて会ったのは、五月なかばの、ひどくむし暑い日の午後だった。場所は新宿駅東口の、ライオンの顔を彫った給水塔の前である。

その日のことを、克巳ははっきりと憶^{おも}えている。高速度撮影のフィルムを映写する時のように、彼はその場の情景を正確に頭の中に思い返すことができた。

それは、相手が際立^{さだ}って美しい婦人だったせいもあるかも知れない。だがそれだけではなかった。そのひとと持った、わずか一時間足らずの交通事故のような情事は、何か彼の心の深い部分にひっかかる謎めいたものがあったのだ。それが永く彼をとらえているのだった。

その日、森田克巳は仲間の学生活動家たちと共に、朝

から新宿駅東口の広場に立っていた。三人の女子学生もまじえて、彼らは都内に設置された米軍野戦病院撤去運動の署名と、街頭カンパ活動に参加していたのである。

「市民の皆さん！ ベトナム戦争と日本列島の永久核基地化に反対する市民・労働者の皆さん——」

携帯用拡声器のひび割れた叫びを背後に聞きながら、克巳はそのとき、雑踏の中でなぜかふと奇妙な孤独感にとらわれかけていた。

へどうしたんだ、すっかりしろゝ

と、彼は口の中で自分に呟いた。

羽田事件や佐世保の原子力空母寄港阻止闘争以来、彼らにとって街頭カンパは単なる資金獲得の手段ではなくなっている。それをきっかけに、学生と行人の間に思いがけぬ議論や話し合いが生まれることもあったからだ。時にはそれが街頭討論会めいた小さな渦を作ったりもした。それは市民や労働者との連帯を望んでいる学生たちにとって、疑いもなく大事なことだったのである。

だが、その日はなぜか行きかう市民たちの目は、克巳たちに冷たかった。通行人たちは彼らの呼びかけを無視して、足ばやに通過して行った。カンパはともかく、署

名にさえ手を振って顔をそむけて行く人々がほとんどだった。

機械的に通行人に呼びかけながら、克巳は一瞬、周囲の物音がふっと遠のき、目の前の風景が影絵のように色を失うような感覚をおぼえた。

「疲れているのだ」

と、克巳は自分に言い聞かせた。それは事実だった。

昨夜は一睡もせずに情宣ピラを刷っている。おまけに今朝はインスタントラーメン一個を、疲れた胃袋に放りこんだだけだ。先週のデモで痛めた左の足首が、熱をおびて重い。

克巳は痛む足を叱咤するように強くコンクリートの舗道で足踏みした。鋭い痛みが足を走り、頭をつらぬいた。
「痛い！」

目が覚めたような感じだった。克巳はゆっくり目を見て前方を眺めた。午後の新宿は、西日と、埃と、騒音で、いやらしくふくれ上っていた。克巳は喉にからんだたんを吐こうとし、思わずそれを飲み込んだ。その時、誰かがじっと自分をみつめているのに気がついたからである。
「へだれだろう？」

そのひとは、克巳が立っている場所から五メートルほど離れて、給水塔のすぐ前のあたりにいた。

白い高価そうなスーツを着た、三十歳前後の美しい女だった。黒い豊かな髪を真ん中で分けて頭のうしろでまとめ、淡い化粧をしている。知的な感じと、どこか官能的な匂いが混じりあった彫りの深い顔である。克巳はその女と視線があった時、一瞬どきりとした。自分をみつめている女の大きな目に、思わず目をそらしたくなるような何かひどく暗いものを感じたからだだった。

彼はそんな目をした女を、これまで見たことがないような気がした。彼の周囲にいる女子学生たちは、誰ももっと若い、いきいきとした目の色をしていた。だが、そのとき彼に向けられている女の視線は、それとは全く違ったものだった。彼女は死期の迫った老人が若い少年を見ようという目で彼を見つめていたのである。

「どうした、おい」

うしろから肩を叩かれて、克巳は思わず夢から覚めたようにわれに返った。携帯用の小型拡声器をさげた仲間の一人が、彼の横に立っていた。

「なにをぼさっと見てるのかと思ったら、あの女か。女

「優かい」

「さあ。知らんな。それよりマイクを貸せ。かわろう」

克巳が拡声器を取ろうとするのを相手はさえぎって、

「いいよ。それよりかお前、あの女に署名たのんでみろよ。えらい美人だからって敬遠することはないぞ。ほら、行ってみろ」

「よし」

克巳は署名簿の画板を抱えて、その女の前に行った。

女はその間中ずっと彼の顔から目を離さなかった。

「署名をしてくれますか」

克巳は背中に仲間のからかうような視線を感じながら、早口で言った。

「いいわ」

女はあっさり応じてボールペンを取り、少し考えてゆつくりと名前を書いた。そして、首をかしげるようにして自分の書いた字を眺めた。克巳の目の前に、女の優しい横顔の線が傾き、深く切れ込んだ襟の間から白い光沢をおびた乳房のくぼみが見えた。

「これでいいかしら」

女は呟くように抑揚のない声で言い、顔をあげて克巳

を見た。そのかすかに紫がかった暗い目に、彼は一瞬、ふっと軽い目まいを感じたのだ。

それが一瞬のことだったのか、それともわずかな空白があったのか克巳にはわからない。だが彼女の手が銀色の留め金のついた高価そうな白いバッグから、五千円札を抜き出して彼の目の前にさし出した時、克巳は思わずわれに返った。

「はい、これ」

と、彼女はその真新しい紙幣を指先で二つに折って、署名簿の上にのせた。克巳はあっけに取られて相手の顔を眺めた。

「どうしたの？ あなた、カンパを集めてるんでしょ？」

「ええ、しかし、これは——」

克巳は思わず口ごもった。

「多すぎるかしら。でも、これはただであげるんじゃないの。私のほうにも、あなたにお願いしたい事があるのよ」
女はかすかに微笑して克巳を見た。

そして、その女が森田克巳の耳もとに顔を近づけて何か囁こうとしたとき、華やかな女の声が背後で響いた。

「ごめんなさい、きい子。あたし、三十分もおくれちゃった」

大胆なミニスカートの服を着た、熱帯魚のような女だった。髪を栗色に染め、両手の指に変わった形の指輪をいくつもはめている。克巳には、その女の正確な年齢も、職業も、判断できなかった。ただ、その高価そうな揃いの靴とバッグ、服やアクセサリーなどから、普通の勤めを持った娘や、主婦でない事だけはわかった。と言って、酒場のホステスといった感じでもない。

「あなた、やっぱりきたのね」

と、きい子と呼ばれた女が、意外そうな口調で言った。

「あんまりおせいから、もうこないのかと思ってたわ」

「約束したんだもの、絶対に来るわよう。それともなに、あたしがきちゃあ迷惑なことでもあるの？」

「じつはそうなの」

「ひどい！」

指輪を輝かせてその女は軽く相手の肩を叩く真似をすると、

「ときにこちらのハンサムはどなた？ 一見全学連ふうって感じだけど。そう？」

「署名とカンバをお願いします」

と克巳は言った。彼女は署名簿の上にのっている五千円札を眺め、目をみはって驚いた顔をした。

「これ、どうしたの」

「私のカンバよ」

と、きい子と呼ばれた女が言った。

「まあ、きい子ったら——。あきれた」

「そう？ あなたが例の男の子たちに使ってるお金の何十分の一じゃないかしら」

「あたし、サインだけさせて頂くわ。これ、何の反対？」

「米軍の野戦病院撤去運動のための署名です」

あ、そう、と女はうなずいて無造作にペンを走らせた。

「ありがとうございます」

克巳は礼を言うと、五千円札をつまみあげて、

「これ、お返しします」

「なぜ？」

「条件つきのカンバじゃ具合が悪いですから」

「そう」

白い服を着た女は、その五千円札をバッグにもどしな

がら克巳を見て、さりげなくたずねた。

「あなたたち、今日は何時までここに立ってるの？」

「さあ。夜の十時頃には引きあげる事になるんじゃないかな」

十時ね、と女はうなずくと、真面目な顔で言った。

「そのあとであなた、一時間ほど私とお喋りをする気はないかしら？」

「激しいなあ、きい子は」

と、横から栗色の髪の方が冷やかすような口調で言った。

「どうなの？」

女はそれには耳をかさず、重ねてきいた。

「一時間位なら——いいですよ」

と、克巳は言った。そう口に出してしまった後で、おれは馬鹿げた事をしようとしている、と思った。十時ちょうどに、この給水塔の前に来るわ、と女は言った。その時、一瞬だけ女の暗い老人のような目に、何か若々しい光が通り過ぎるのを克巳は見た。

霧子は椅子の背に右腕をかけ、上体をやや傾けるよう

な姿勢で舞台に見入っていた。

ギターの音が一瞬とだえた。切迫した沈黙が生まれた。次第にたかまる激情を全身で支えながら、男の両手が虚空をつかむ。洋弓のように反った腰と、頬をつたう汗。

向きあった女の額も汗で光っている。濡れてうなじにはりついた漆黒の髪。握りしめれば折れそうな細身の体が、欲望への期待と怖れに引き裂かれて激しく喘いでいる。潮騒のようにかすかに、やがて次第に音量を増してくるギターの響き。

霧子は膝の上の手をぎゅっと握りしめた。体の奥から不意に突きあげてくる熱い欲望の波を感じたのだった。

彼女は大きく目を見開いて、舞台の女の踊り手を見つめた。この店に通ってくる女性客の大半は、いま彫刻的な横顔を見せているスペイン人の男が目当てだった。向いあって坐っている花森英子も、そうなのだ。形のいい小鼻をかすかにふくらませ、オレンジ色の唇を半ば開いたまま、吸いよせられるように体を乗り出している。

女客たちは皆そうだった。フラメンコの音楽と踊りが

呼び物の、このスペイン風レストランは、そういう客でにぎわっていた。疲れてむくんだ黄色い顔の日本の男たちにはないものを、彼女らはもとめているのだ。ジブシーの男の踊り手たちの、まるでナイフのように鋭利な腰の線と、劇的な表情の変化と、なまなましい野性の匂いに惹かれて、女客たちはこの店へ集ってくる。

だが、霧子はそうではなかった。彼女をとらえているのは、いまジブシーの男と向きあって喘いでいる、この店ではただ一人の日本人の女の踊り手だった。

霧子は決してスペイン舞踊にくわしいわけではない。だが、マドリッドで長く本格的な勉強を続け、いま日本でスペイン人たちと踊っているその踊り手の舞台に、彼女は何か独特のものを見ていた。小峰麻子というその女の踊りには、ジブシーたちの持っていない微妙な翳りのようなものがあつた。それは何だろう、と霧子は思う。その疑問が彼女の気持を小峰麻子のほうへ傾けていたのかも知れない。

不意に激しくギターが鳴った。舞台の中央で身をひるがえすと、男と女はひとと抱きあつて化石したように動かなくなつた。

拍手がおこつた。花森英子が上氣した顔で手を叩いているのを、霧子は醒めた氣持で眺めていた。

「今夜のゴンザレス、変にハッスルしてたと思わない？」

と、英子が振り向いて言った。

「彼、すごく意識してたわ。いつもとぜんぜん目つきが違ったもの」

「そう」

霧子は興味なさそうな口調で、

「わたし、女のひとのほうばかり見てたから氣づかなかつた」

「冷いのね、きい子は——」

英子は、それがくせの手をあげて相手をぶつ真似をしながら、

「彼はあなたが前の席にいたから意識してたのよ。どうする？」

「どうするって？」

「最後のステージが終わったら、誘い出そうか。どうせ旦那さまは今夜もおそいんじゃないの？」

「おそいと思うわ」

霧子は静かな口調で言い、英子の顔をみつめた。

「じゃあ、いいわね」

と、花森英子とは下からすくうように霧子を見ると、
「マナージャーに今すぐ頼んでくるわ。早くしないと、
ほかに持って行かれちゃう」

舞台では出演者全員が登場してフィナーレの踊りがは
じまっている。花森英子はそれを横目で眺めながら、椅
子を引いて立ち上ろうとしていた。いつもこうなのだ。
何か考えつくと同時に体が動いている女だった。

「待って」

と、霧子が英子の腕をおさえて言った。

「なによ」

「私、今夜はだめだわ」

「どうして」

「先約があるもの」

「え？」

英子はオレンジ色に光る唇を半ば開いて、

「まさか、さっきの全学連じゃないでしょうね」

「十時に給水塔の前に行くって約束したの」

「あきれた」

英子は椅子を引いて坐りなおした。舞台の音楽が一段
と高まり、突然とだえると拍手が湧いた。オレー！ オ
レー！ と異国ふうの掛け声をかける客もいた。英子は
さっきの踊り手のほうに顔を向けて、しきりに意味あり
げな視線を投げかけている。

「行きたければ、あなただけ行けばいいわ。男一人に女
二人というより、すっきりすると思うけど」

「勝手なこと言ってる」

英子はずつと顎をあげて、すねたような顔をした。

「彼、さっきからきい子のことずっと見ながら踊ってた
じゃない。彼の心を動かしたのは、わたしじゃないわ。
あなたよ。わたしたち二人で招待するって言えば、彼、
きつと喜んでくれると思うわ。でも、わたし一人じゃどう
かな」

「めずらしいこと言うわね。自信家のあなたが」

肉弾戦なら自信ありだけど、眼技はだめ、と英子は際
どい冗談を言って煙草に火をつけた。鼻から男のような
しぐさで煙を吐きながら、大胆に足を組むと、

「きい子、あなた、本当に行くつもりなの？」

「ええ」

舞台を降りて行く踊り手たちの中から、ゴンザレスがしきりに自分の方を見るのを感じて霧子は顔をそむけた。熱っぽい視線で、肌をなでまわされたような気がしたのだ。外国の男たちの直接的な関心の示しかたには、いつも生臭い欲望の匂いにつきまとう。霧子はそれが好きではなかった。

「あの学生と会って、どうするつもり？」

「どうするって？」

「意味ないじゃないの」

この人にはわからないのだ、と、霧子は目の前の派手な顔立ちの英子を眺めて思った。わかって欲しいなどとは思わない。人間というやつは、誰だって他人の事などわかりはしないのだ。夫婦の間でさえも、わかり合えない部分が沢山ある。まして単なる遊び仲間の英子に、何をわかってもらおうというのか。

「行くわ」

霧子は腕時計を眺めて立ち上った。十時十五分前だった。

霧子は英子と別れると、伊勢丹の横を通って大通りへ

出た。

夜の新宿の街には、奇妙な活気があふれている。人々は舗道をゆっくりと河のように流れていた。夜空はネオンや灯火の反映で、ぼんやりと明るく、駅の方からは国電の音が絶え間なく響いてきた。雑踏の中で、うつろに群衆の流れに身をまかせて歩いていると、霧子はなぜか不思議な安心感を覚えるのだった。家にいる時は、そうではない。夫の良平と二人でいると、なおのことだった。暗い夜の海に一人で櫂のないボートで浮んでいるような、そんな重い孤独感がのしかかってくる。

やめようと思いつながら、未だに睡眠薬が必要なのは、どうしようもなかった。だが、それは良平には知らせていない。知らせたところで彼は黙っているだろう。

へおれの責任じゃない」

きつとそう言って、医師に相談することをすすめるだけに違いない。

新宿駅の東口には、さまざまな若者たちが集っていた。首飾りをさげ、花模様プリント地のスラックスをはいた男の子。上半身裸で、革の長靴をはき、植込みの間に寝転んでいる労務者ふうの酔漢。ギターをかかえ、片目に

黒い眼帯をかけた少女とその仲間。それを撮影しているカメラマン。数人の典型的なフーテンの格好をした青年が、ジャーナリストらしい中年男の取材を受けている。

給水塔の前では外国人の無銭旅行者らしい二人連れが、丹念に色チョークで路面に絵を描いていた。青を多く使ったおかしな少女の顔だった。

霧子はその前に立って、向い側のビルの電光時計を眺めた。十時を五分過ぎていた。

へ十五分たったら帰ろう

と、霧子は思った。彼女は給水塔の前に、腕組みして立っていた。通り過ぎる男たちは決ったようにちらと視線を投げてよこした。霧子がみつめると、あわてて目をそらす男と、からみつくような目つきでみつめ直す男とがいた。

電光時計の数字が十時十分を示したとき、霧子は向いの道路を渡って近づいてくる学生の姿を見た。

「きたのね」

と、霧子は急ぎ足でやってきた学生にうなずくと、時計のほうを顎でしゃくって言った。

「十五分になったら帰るつもりだったわ」

「そうですか」

学生は少しはにかんだような微笑をうかべて、

「いろいろありましてね」

「もういいの」

「ええ」

神経質そうな青年だ、と霧子は思った。なで肩で首が長い。髪を長目にのばしているせいか、ひどく幼く見えた。

「大学生でしょう？」

「もちろんです」

少し怒ったような口調で学生は答えた。

「歩きましょう」

と、霧子は言って歩き出した。学生は黙ってついてきた。

「どこへ行くんです？」

と克巳はきいた。

「さあ」

そのひとは歩きながら少しおくれについてくる克巳を振り返ってかすかに微笑した。どこか植物的な、